

本館展示室は地下にあり、長いスロープを降りていくと、まず地下式横穴墓の再現展示に遭遇する。ガラス張りの床を通して、地下への穴を見下ろす形であるが、その暗闇の深さに来館者の反応は様々で、中には恐怖感を覚える人もいる。

バロック調というか、何ともいえない雰囲気音楽が流れる中、展示室全体は照度を押さえた中に、展示物が配置されている。手前味噌ながら、「闇」と「光」の対比がうまく計算され、一つ一つの展示に集中できるせいか、来館者の中には、時間の経過も忘れて見入ってしまった、という人も結構多い。当館に赴任して2ヶ月、当初、展示の斬新さに驚くと共に、壁面のメッセージを時間の経つのも忘れ、読みふけてしまったことも度々であった。（展示室内には時計がありません。お時間のある方は心ゆくまで展示をお楽しみいただきたいが、時間に制約のある方は、時計持参か、呼び出しアナウンスのご利用をお勧めしたい。）

谷崎潤一郎は、「陰影礼賛」の中で「・・・われわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った・・・」と著し、日本人の美意識を光と闇の対比に見いだしている。

確かに、照明を落とした展示室の中においてわずかな光を受けた展示品は、闇の中に浮かび上がり、時には優しく、時には妖しい光を放ち、作られた当時の精巧さ、美しさすらイメージできる。しかし、光と闇の世界が醸し出すのは美しさだけであろうか？

考えてみれば、電気電灯など無かった太古の時代、日が沈めば待っているのは闇の世界。先の見えない恐怖、周囲の獣におびえ、寒さに震えていた我々の祖先を救ったのは火の光、夜明けの太陽であったろう。

古代人の闇への畏怖、光への憧憬といった感覚は、私たちのDNAに受け継がれ、同じ情景の中で千年以上の時を超えても無意識に蘇るのでないだろうか？それはあたかも“見えざる手”が展示室にいる私たちを、過去の記憶への誘うかのごとく・・・

県立図書館勤務時代、くずし字で書かれた古文書を扱う機会があり、様々な内容の文書の整理や読解に取り組んだことがあった。二百年以上前の文字を目の当たりにした時、書き残した人の姿や思いが想像され、文字を通してそれらの人々と対話をしているように感じたことを思い出した。

展示物は私たちに何も語りかけはしないし、動きもしない。いつまでも見る者の前に存在し続ける。展示室の光と闇の中、当時の人々の身近にあった品々を眺めながら、“見えざる手”に意識を委ね、太古の時代にタイムスリップするのも良いかもしれない。しかし、くれぐれも現在の時間に戻ることもお忘れなく！

(岡崎裕也)